

旧東独の若者たちにおける排外的傾向の背景 —いくつかの意識調査から—

大塚 讓

はじめに

「それ以来、このザクセンの小都市は、酔っ払った少数者の粉れも無く極右的な暴狼籍が、いくつかの比較的大きな住民グループの共感によっていとも易々と本物の迫害と化してしまふことを請け合っている。パチンコ玉や火炎瓶や石ころで外国人を追い掛け回す未成年の暴徒たちに何百人ものやじ馬が拍手喝采を送り嘶し立てたのは、現代ドイツ史でも前代未聞のことだ」

(I)。これは旧東独における極右による外国人・難民襲撃事件に質的变化をもたらしたと評される「ホイヤスヴェルダ事件」をめぐる特集記事の一節である。事実上のドイツ統一と言われる通貨同盟(一九九〇年七月一日)以来、旧東独経済は急速な市場経済化により悪化の一途をたどり、失業への不安がとりわけ職業実習生を中心とする若者たちを襲った。一時の統一の熱気も冷め、予想をはるかに越える厳しい現実が露呈し始めた九一年になって、難民施設への襲撃事件の報が特に旧東独地域から頻々と

して伝えられるようになる。そしてついにこの「ホイヤスヴェルダ事件」にまで事態はエスカレートする。「九月十二日、ホイヤスヴェルダの青年たちがモザンビーク、ベトナム人を主な住民とする外国人労働者ハイムを、その翌日には難民ハイムを襲撃した。心ある世論に何よりもショックを与えたのは、近隣の住民が総出して、この攻撃に拍手を送ったことであつた。青年たちによる襲撃は一周間にわたって継続されたが、州政府、警察はなす術を知らず、ハイムの住民を他地域に疎開させてしまった。

これは無法者のゲバルトに、法治国家が降伏したケースとして、世論の批判を浴びた」(II)。最初に引用したディ・ツァイトの記事は「迫害」(Pogrom)という言葉を用いているが、Pogromと言えば現代ドイツ史では直ちに「ユダヤ人迫害」を意味し、「ユダヤ人迫害」と言えば「水晶の夜」を連想させる。「一九三八年十一月九日、ゲッベルスが率いるナチス部隊の扇動で、ドイツ住民が自然発生的に集団となって、ユダヤ教会、ユダヤ人が経営する商店、ユダヤ人住宅打ち壊しの狼藉を働いた。多くのガラスが飛び散ったところから、この夜は『水晶の夜』と呼ばれた」(同上)。最初に述べた「質的变化」とは、このような自然発生的な集団的襲撃のことを意味している。そしてこの「質的变化」はこの間の一連の襲撃事件に見られる「ナチズムの非タブー化」の諸兆候との内的連関を感じさせる。

こうした傾向は旧東独全体に見られる「ゲバルトのポテンシャル」の高さ、「青少年の五四%が外国人に対して拒否的」(III)と言われる外国人敵視意識の強さと根底において結び付いているにちがいない。そしてこうした排外的傾向は「統一」の歡喜がや

がて失望に変化していった社会的、心理的背景」(同上)が肥沃な土壌を提供していると考えられる。というのは「とくに青年の方向喪失は極右主義興隆の源泉」(同上)だからである。こうしてここでは、旧東独の青少年全般の「統一」をめぐる「アイデンティティー」の行方とのかかわりにおいて「外国人敵視意識」と「極右的志向」の現況をいくつかの意識調査に基づいて辿ってみた。「義」を僭称する「排外主義」の発想構造に探りを入れる試みは、残念ながら今や日本自身のためでもある。

一、「壁」の中の若者たち

「ベルリンの壁崩壊」以前の「東独」時代の若者たちのアイデンティティーはどのようなありさまを呈していただろうか。ここでは意識調査研究の成果に基づいて一九七〇年代以降一九八九年十一月の『東独』の崩壊に至るまでの「社会主義的アイデンティティー」、「東独」的アイデンティティーの衰退の流れを検証し、併せてこの流れにおける若者の「層」による反応のありようの相違を跡付けてみよう。つまりここ

での論点は、「ベルリンの壁崩壊」が、実は東ドイツ内部で公認の意識を蚕食する形で着々と進行して来た一連のプロセスの必然的帰結であるということ、また若者たちの反応については、社会批判に関して「実習生」や「若い労働者」が(時には「生徒」も)先導的な位置を占め、エリートである「学生」はそのるか後塵を拝するのを常としたということ、この二点に集約出来る。例えばマルクスレーニン主義へのアイデンティティーについては、実習生や若い労働者の間では既に七〇年代の終わりに以後退している「七五年四六% (六一%。カッコ内は学生。以下も同じ) / 七九年三三% (五七%) / 八五年一四% / 八九年五月九% (三五%) / 同十月六%。(IV、二七※) (*ここでは「強い肯定」の答えの数値のみを示し、「条件付き肯定」や「否定」のそれは示していないが、おおよその傾向は把握出来るものと考ええる)。同様にソ連へのアイデンティティーについても、七〇年代には東独の若者たちもまだそこに範を求めていたが、八〇年代の始め以来若者達のあらゆる層において明らかにそのような志向が後退している「八五年九% (十九%) / 八六

年十九%(三六%)／八八年十%(八九)年五月十六%(同二八)。社会主義体制の優越性についても八〇年代の終わりにはその確信が急速に後退して行き「七五年六三%(七八%)／八三年四七%(六八%)／八八年五月一〇%／八九年十月三%／八九年五月十五%(同二九)、SED(ドイツ社会主義統一党 ドイツ共産党)も同様に支持を失って行く「七〇年二四%(三二%)／八六年二六%(四五%)／八九年五月十%(二六%)」(同上)。このように社会主義が世界観および現実の政治体制の上でアイデンティティーを喚起する力を失って行けば、「ドイツ民族の社会主義国家」である『東独』の唯一の存在根拠が消失し、「ドイツ」のみが残る。こうしてライプツィヒの「月曜デモ」以来「ホーネッカー体制打倒」を求める人々の合言葉は「ドイツ、唯一の祖国よ!」となった。このスローガンは、八〇年代半ばまでは密かな憧憬の対象ではあったが事実上タブーに等しかった。しかしほとんどの場合、「ドイツ」とは自由と繁栄を誇る『西独』社会を意味した。従って『東独』へのアイデンティティーの衰退「七五年五七%(六六%)／八五年五一%(七〇%)／八八

年五月二八%(五二%)／同十月一八%／八九年二月三四%(同三〇)は、『西独』の評価の上昇「政治的に進歩的」七八年九%(四二%)。カッコ内は東独についての評価、つまり自己評価。以下も同じ)／八八年二八%(十七%) 暮らし向きが良い・七八年十一%(三六%)／八八年二二%(十%) 好感を持つ・七八年一九%(三九%)／八八年三一%(二八%)」(十四〜十六歳の生徒を対象)(同三二)と表裏を成していた。そして在米の価値観総体の正当性喪失の中で若者たちが社会批判の拠って立つ価値基盤として選び取ったのは、頭越しのお仕着せの意志決定を嫌う「自己決定」性と自らの能力と生活上の享楽との実現、すなわち「自己実現」であった(同三四〜三六)。

一、「壁」から出た若者たち

八九年十一月以降の、とりわけ九〇年の社会的大変動は東ドイツの若者たちのメンタリティーに何を刻み付けたであろうか。ここでは「移行期的メンタリティー」の諸特徴を辿ってみよう。

若者たちが「壁」を崩壊させることによ

って半ば自ら招き寄せた新しい生きる条件とは、次のようなものだった。①多元主義的デモクラシーの中で自由とチャンスの享受。個々人の自己決定への要請。②市場経済への移行。③ナショナル・アイデンティティーの喪失④任意の情報への無制約の接近可能性⑤西側世界への旅行可能性⑥社会的不安定性の増大(犯罪や過激グループの攻撃的暴力等の増加による不安)(V三五〇—三五一)。このまさしく社会的条件の激変がわずか半年余りの間「ベルリンの壁」崩壊―八九年十一月八〜九日、通貨同盟(実質的なドイツ統一)―九〇年七月一日」に実現したのである。当然ながら若者たちはこうした激変の軋轢の中で翻弄され敏感に反応する。

若者たちが『西独』との「統一」から一番期待したものが「幸福な人生」(八六%)、もっと高い「生活水準」(八五%) (複数回答)(同、三五四)だったのは、既に七〇年代半ば以来『東独』において「社会主義アイデンティティー」の衰退と引き換えに徐々に進行して来た「自己決定や自己実現への志向」や「生活享楽的傾向」の必然的帰結であつたらう。しかし「アイデンティ

「ティー」の問題には根深いものがあり、九〇年九月まで（つまり十月三日の正式な「統一」の直前まで）若者たちの間で自分を「ドイツ人」と感じる者四八％に対して「東独国民」と感じる者が四一％いたが、これには政治統一よりひと足早く訪れた東独の経済状態の悪化が若者たちに統一への不安感を呼び起こしたことも部分的には影響しているよう。いずれにしても、「ベルリンの壁」崩壊以来、東独の若者たちの意識の中では、統一への希望と失望との間の激しい動揺に呼応して「ドイツ人意識」と「東独」人意識」も上昇と下降を繰り返して来たのである（同三五六）。

若者たちの揺れ動く意識の変化を政治のレベルで見てもよい。彼らは「壁崩壊」前後から三月十八日の「東独」最後の人民議会選挙にかけては政治に強い関心を示すが、それ以降は少しずつ関心の程度が下降線をたどり、しかも有権者全体の平均をかなり下回っている。「強い関心」九〇年二月七九％／四月六七％／九月五三％（対象…「実習生」）（VI、七〇一）、「日曜でも選挙に行く」八九年十一月八〇％（八六％。カッコ内は全有権者。以下同じ。）／九〇年二月

七〇％（七九％）／三月七七％（八五％）／六月七一％（七七％）／九月六七％（七十二％）／十二月六三％（八一％）（対象…一八〜二四歳の若者）（同七〇一）。十月には統一後初の東部ドイツ新五州の州議会選挙が、十二月にはやはり統一後初の連邦議会選挙があつたにもかかわらず、である。通貨同盟以前に既に始まった東独の経済状態の悪化が特に若者たちには強い失望を与えたのであろうか。

その故もあつてか既成の大政党への支持が減りつつあり*「CDU／CSU」九〇年四月四〇％／同六月三六％／九〇年十二月三二％ SPD・九〇年四月四九％／九〇年六月三八％／九〇年十二月二九％（*CDUの支持が横這いしないし漸増を示す調査もある）（同、七〇三）。逆に市民運動的小政党への支持率は比較的高いレベルで安定している「たとえば九〇年同盟／緑の党は九〇年四月〜十二月の若者の支持率…十八〜二四％」（同上）早めに教宣活動に着手したことが奏功して共和党「八九年結成のミュンヘンに本拠を置く極右政党。最近の各所の地方議会の選挙で一挙に議席を増やしている」も九〇年十二月には四％の支持

を得ている（同上）。

若者たちの市民運動への傾倒には、「壁崩壊」後の新出発に際して抱いていた希望が満たされず、彼ら自身にかかわることが彼らのおずかり知らないところで決定されている、というプラスチックンが駆動力になっている面がある。その意味で東独の若者たちの間には高い政治的抵抗のポテンシャルがある。この旧体制と新体制とによつて「二重に失望した世代」が政治を厭いリタイアしてしまうか、社会批判的勢力として抵抗力を発揮し続けるかは、失業率の持続的上昇という事態の益々の悪化とも相俟つて、今後目を離せない重要な社会的フアクターとなつて来よう（同七〇三〜七〇四）。

東西ドイツ人の共生の困難さが大きな社会（心理的）問題となつてきており、新しいアイデンティティーを求める東ドイツの若者たちの行方に暗い影を投げ掛けている。八八年には、東独の若者たちの間で紋切り型の政治宣伝を押し退けて西ドイツ人がはじめてポジティブに評価され、逆に東ドイツ人（自国民！）が距離を置いて時にはネガティブに観察され始めた（同七〇八）

が、それはほとんど意識の中における「壁」の崩壊の前兆であった。やがて現実の「壁」は本当に撤去されたが、しかしながら意識の中の「壁」が思いの外堅牢であることが判明して来る。それを象徴するのがオツシ（西独における東独人のあだ名）とヴェッシー（東独における西独人のあだ名）という独特の感情を引きずった言葉である。東西の経済発展と住民の生活水準の格差は巨大である。古いアイデンティティーはかたがた捨てたが新しいものがいつになつたら身に着くか見当もつかない。西独人の方でも一時の熱狂が冷めてみると何かと手の掛かる貧しい義兄弟が段々お荷物になつて来た。東独人は新旧の社会システムの公私にわたる血の滲む切り替えに適應しなければならぬので、いつも自信が無く西独人に遅れを取つてばかりおり、「二流のドイツ人」意識が鬱積して行く。「一九九一年二月末に、東独人の八五％が今後長い間軽んじられる二流の市民に留まらなければならぬ」と考えていた（VII）。物質的かつ社会的な生活状態の同等化を短時日に達成することが一番効果的措置である（VI、七一〇）。ことは誰にも分つてゐるが、その可能性は

皆無に等しい。

東独における失業への不安の高まりは留まるところを知らない。九〇年四月には失業者数六万五千人（失業率一％）だったが、統一（十月三日政治統一、七月一日通貨同盟＝経済的統一）後の同年十二月には約十倍の六四万二千人（失業率七・三％）に増加し、時短労働者も一八〇万を数えた。九一年七月には失業者数百六万八千六百人（失業率十二・一％）を記録している（VIII、二一）（九二年度については未確認）。原因は計画経済から市場経済への急速な移行にあると言われるが、次の数字が経済状態の悪化がいかに予想を上回る速いテンポで襲つて来たかを物語っている。すなわち、既に九〇年年頭には東独の八八％の若者たちが自国における将来の失業の発生を予想していたが、同年七月には、ほとんどすべての若者（九六％）が東独地域における失業の持続的増加を予想し、通貨同盟成立後には、早くも多くの若者たちが経済の構造転換によつて職を失うかもしれない現実に直面し始めている（VI、七二二）。しかしそれでも間近に「統一」を控えた九〇年九月の段階では、期待が再度膨らんだせいか、将

来について依然楽観的風潮が支配的だった。「改善予想…六三％／不変…二六％／悪化…十一％」（同上）。しかし九〇年末（十二月二日に初の統一選挙があつた）には、選挙の熱気が冷めて来るとともに、経済統一実現の困難な長い道程が認識され始めた。「この時期には、若者たちのやつと半分（四七％）しか現在のポストの確保を確信しておらず、揺るがぬ確信を持つてゐる者は五％に過ぎなかつた」（同上）。そしてこうしたより厳しい現実認識が浸透して来るとともに、将来も東部ドイツに留まろうとする若者の割合が減少し始め、逆に移住の用意のある者（「トランクに腰掛けてゐる者」）の割合がわずかに三カ月の間に八％から十一％に増えていることは、シュピーゲル（VII）が伝えている通りだが、別の複数の調査も移住を決意している若者の割合の深刻な増加を報告している。このパニック状態に現れている東独の若者たちの失業への強い不安「若い就業者の失業への不安…八七年一四％／九〇年六九％ 実習生…八七年一五％／九〇年七一％」（VI、七二二）は、『東独』が就職の安定性を誇つた社会であつたことを踏まえて理解されるべきであろう。

このような具体的データに基づいて次のような推論が示される。「破局的な経済状況、特に益々広がって行く失業がある雰囲気、転換に導いてしまった」。雰囲気、転換とは、「歓喜や希望に代わって失望、絶望、さらには憤激さえも前面に出て来ている」とのである(Ⅵ、七二二)。しかし同時に忘れてならないのは、大部分の東独の若い就業者たちが「市場経済の排戦」にたじろがず立ち向かおうとしていること「若い就業者たちの職業変動への用意(九〇年十二月)・・・同じ職業での再研修Ⅱ七四％／類似した職業での再研修Ⅱ四五％／全く別の職業での再研修Ⅱ二二％／専門外の活動をするⅡ二四％／自営するⅡ十四％」(同上)であろう。

三、「心」に「壁」を築く若者たち

「外国人敵視意識」と「極右的志向」

「外国人敵視意識」

「外国人敵視意識」は「極右的メンタリテイ」の最も本質的な発現形態であつて、この二つの精神態度の共通性は「ナシヨナリズム・権威主義症候群」にあり、これはとりわけ異種の人々に対して発揮されるエリ

ート意識、自分の誇示、傲慢さ、更には不寛容さ、権力や暴力の投入によって特徴づけられている(Ⅸ、一〇五二)。しかし「外国人敵視」が必ずしも常に「極右的グループ」内部でのみ行われるわけではなく、むしろ「外国人を敵視する発想の持主の大部分は極右的であると認めがたい」(同上)のである。換言すれば、「外国人敵視意識は極右主義的な行動志向／メンタリテイよりももっと一般的な経済的・政治的・社会的条件構造によって決定され動機づけられる」のである(同上)。

東独社会の崩壊によって、住民の大部分は人生の危機(旧来の価値の崩壊、新しい価値への適応、失業等)を経験しており、ここから思考や行動の不安定性、自信喪失が生じている。若者たちのケースについては既に詳しく立ち入ったところである。そして頻発する外国人への攻撃は、このようにして鬱積した怒りやフラストレーションの代償的行為と解釈される。「人間心理の基本的な代償メカニズムは、自分にはもつと価値があることを強調すると同時に、もつと劣等で罪や脅威の担い手と見なされる『異種の者たち』の一定グループの価値を

貶しめる点にその本質がある。彼らにだつたら襲いかかつて溜まりに溜まった欲求不満をぶちまけたつてかまわないのである。日々体験される社会的な困窮と不安の度合が強まれば強まるほど、外国人敵視意識と極右的志向へ流れる傾向がそれだけ大きくなる」(同、一〇五二—一〇五三)。

外国人敵視意識は現在の旧東独に広く見られる風潮である。例えば東部ドイツに生活する外国人の「数」について、若者たちの約半分が「外国人が多すぎる」と考えており、実際には人口の〇・九％しかない(『西』は七・八％)ことを考えると重大な潜在的嫌悪が存在すると言える。もちろん同じ問いについて極右グループの支持者では「多すぎる」のパーセンテージが軒並み九〇％前後に跳ね上がるのだが(同、一〇五四)、また外国人の数の削減の是非についての設問についてもほぼ同じ結果が出ている「男子Ⅱ六二％、女子Ⅱ四四％、平均すると半数以上の若者たちが削減を望んでいる。ここでも極右政党・共和党の支持者は九六％にも達する」(同、一〇五五)。他方、調査によって若者たちが外国人問題についてひどく情報不足であることも明らかにな

った「ドイツにおける外国人の日常的問題についてよく知っているとと思う…二三% よく知らない、ないしは全く知らないと思う…三六%」「外国人と直接的コンタクトを持つ…十一% 稀にしか無い、ないしは全く無い…七七%」「躊躇せず外国人の隣に腰を下ろす…五六% 家に招待する…三二% 結婚する…二〇% (ちなみに「外国人と結婚する」用意のある西ベルリンの若者の割合はこの三倍である)」（同上）。

現在「義」の特集▶

旧東独の若者たちに特有の排外的傾向は、「国民別の親近感」を調べる三つのアンケート調査でも明らかになった。その結果特に注目すべきは、第一に若い東ドイツ人は諸国民を（アメリカ人を初めとする二・三の西欧国民を例外として）年配の人々より否定的に評価し、きっぱりと拒否する。他の西ヨーロッパ諸国ではこの関係が全く逆で、年令が高くなるにつれて外国人に対して不寛容になり、他方若者たちは外国人に対してより寛容でありより敵視的ではない。これに対して旧東独では、若者たち、特に一五―二五歳の人々は年配の人々（かつての社会主義友邦には親しみを抱き続けている）よりも外国人についてより極端に、

より両極的に判断する。お好みの高貴な外国人（オーストリア人、アメリカ人、フランス人等）を肯定的に評価する場合にも、気に染まない外国人（ヴェトナム人、ポーランド人、キューバ人、ロシア人、トルコ人、ジプシー等）を否定的に評価する場合にもそうである。第二に六八年と八八年の評価が逆転していることである。六八年までは諸国民についての評価が政府の政治宣伝に左右されていた模様だが、七〇年代を経て八八年に至り自由化が進んで来ると嫌悪する諸国民と好感を抱く諸国民が六八年とはほぼそのまま入れ代わるのである。この評価の逆転が東西ドイツにまで及ぶ①信頼出来る…六八年東独…一・六八、西独…二・七二（最高…一ポイント、最低…七ポイント。以下同じ）／八八年東独…二・八〇、西独…二・七七 ②知的である…六八年東独…一・七〇、西独…二・三八／八八年東独…二・三四、西独…二・一五 ③進歩的社会…六八年東独…一・六二、西独…二・四七／八八年東独…二・八六、西独…一・七〇 ④好感が持てる…六八年東独…一・七四、西独…二・四二／八八年東独…二・四八、西独…二・四〇（同一〇五九）

のを見ると、自分の足元さえ掘り崩し始めた「社会主義アイデンティティー」衰退の激しい勢いを感じないわけにはいかない。

これまでの調査結果は以下の諸点に要約することが出来る。(一)「外国人敵視意識」は通常特定の外国人グループに向けられている。(二)旧東独の若者たちの間での外国人敵視意識は一九八九／九〇年に急増した。(三)実習生たちが特に外国人に敵対的。(四)女性の方が外国人に対して温厚で寛容。(五)外国人に対する親近感と政治的信条との間には強い相関。(六)両親の学歴等、社会的出自が強く影響。以上の結果、次のように「診断」が下される。▲診断▽旧東独での外国人敵視意識の増大が懸念される。▲理由▽(一)社会経済状態の速やかな改善が望めない。(二)東ドイツ人たちは今後とも「二流のドイツ人」「社会的に恵まれないオツシー」として生きざるを得ない。(三)今後とも難民流入による外国人の急増が予想される(同、一〇五七―一〇五八)。

「極右的志向」
いくつかの発想パターンの調査を通じて、極右的発想が旧東独の若者たちの大部

分によつて支持されていることが明らかに
なつた。まず世代を越えて旧東独に権威主
義的・国粹主義的発想が広がっていること
が確認された。「ドイツが合わない者は出て
行くべきだ・四〇%（賛成、以下同じ）／今

の時代で最も重要なことは法と秩序を維持
することだ、場合によつては実力に訴えて
でも・三三%／我々ドイツ人は再び強い手
で統治する指導者を持つべきであろう・十
七%／ドイツ人はいつだって歴史上最も偉
大な存在だった・十四%／今日青少年は幸
せすぎる。そろそろ彼らが再び規律という
ものを学ぶべき時だ・十五%／どんな社会
にだつて暴力によつてしか解決出来ない粉
争がある・十四%／ファシズムだつて良い
面があつた・十三%」（同、一〇六〇）。ま
た若者たち、とくに「実習生」の間に国粹
主義的・排外主義的考え方がはびこつてい
ることが確認された「賛成出来るスローガ
ン」『ドイツはドイツ人のもの』・生徒四四%
「実習生六七%」ギムナージウム卒業生三
〇% 『アカは出て行け』・生徒四〇%実習
生六一%ギムナージウム卒業生十四%
『外国人は出て行け』・生徒二三%実習生
四六%ギムナージウム卒業生十二% 『一

九三七年の国境に囲まれたドイツを』・生
徒十二%実習生十八%ギムナージウム卒業
生三% 『ユダヤ人はドイツの災い』・生徒
九%実習生十七%ギムナージウム卒業生二
%」（同、一〇六一）。

調査の結果、次のような傾向を確認する
ことが出来る。(一)学生やギムナージウム
卒業生に比べて生徒や特に実習生に極右的
傾向が強い。(二)女より男に極右的傾向が
強い。(三)教養の程度が高くなればその傾
向が弱まる。(四)信仰熱心な若者はより寛
容。(五)政治信条が右寄りになるに従つて、
より権威主義的・国粹主義的・外国人敵対
的になる。(六)(五)は極右的グループで
もはつきり見て取れる。(七)外国人に不寛
容な若者は、より強く極右的発想を示す。
(八)家庭が権威主義的であれば極右的志
向がより強い。(九)旧体制によつて騙され
たと感じている若者たちは、そうではない
者たちよりも極右的傾向を示す(同上)。
ところで旧東独では、若者たちが実際に
極右的グループのメンバーになつてゐる割
合はごく低いが、しかしこうしたグループ、
とりわけ共和党への強い親近感には注意を
怠るべきではない。極右的グループへの共

感を感じている若者の割合は五%を越えて
いるはずである。中でも実習生が一番強く
引き付けられていることを各種調査が裏付
けている。そして若者たちが極右的グルー
プに対して親近感を感じる根拠の第一は
「外国人に敵意を感じるから」「共和党支持
者一〇〇%—全体七七%」、第二は「一九三
七年の国境に囲まれた大ドイツに賛成だか
ら」「共和党支持者八一%—全体五三%」、
第三は「勤勉・規律・秩序といった古いド
イツ的価値を擁護するから」「共和党支持者
七四%—全体二九%」、第四は「真の仲間関
係が得られる」「共和党支持者七〇%—全体
二八%」、第五は「現状に反抗したい」「共
和党支持者四九%—全体四四%」、第六は
「暴力的対立が欲しい」「共和党支持者三八
%—全体五八%」、第七は「退屈しているか
ら」「共和党支持者十七%—全体三二%」
(同、一〇六一)である。

*

以上、旧東独の若者たちにおける「統一」
をはさんだ「アイデンティティ」の推移、
これを縁取りとする「外国人敵視意識」や
「極右的志向」の現況を意識調査の成果に

基づきながら辿ってみた。こうした意識のありようの発生的な理論化はここでの課題ではないが、参考までに「権威主義体制の中で社会化された若者たちは、社会的大変動とのかかわりで極限状態、ないしは危機的状态に陥り、これを克服する際に彼らはやむなくこれまで慣れ親しんで来た戦略や葛藤解決のメカニズムに訴える。外国人敵視意識や極右的傾向は、従って、とりわけ従来 of 社会化の経験によって制約された社会的並びに社会心理的問題状況の処理形態なのである」(同、一〇六三)という示唆に富む言葉をご紹介しておく。『東独』における権威主義的社会的化の問題にさかのぼることが重要となって来る。その際、八〇年代、とりわけ八五年(ゴルバチョフの登場)がエポックメイキングな位置を占めるであろうし、また若者たちのうちでも特に「実習生」の存在に注意を払う必要があるであろう。

*

貴重な機会を与えて下さった内山秀夫先生に心から感謝申し上げます。同時にこのような拙いものしか書けない自分の不勉強

を恥じてもおります。『ドイツ語教育』という本務との兼ね合いをむしろ発条として先に進みたいと思っております。大学に一日も早く本格的な教育の時代が来なければなりません。その際、広い意味での実用のみならず言語を取り巻く社会・歴史的背景に配慮しない語学教育は存在意義を持ち得ないでしょう。語学教師は自らの社会的関心をますます研ぎ澄まさなければなりません。ベルリンで偶然知り合いになり、今もって彼の地で頑張っておられる政治学徒・末次利安氏にはその幾多の示唆と刺激に対し感謝申し上げます。

▶参考資料

- I = Die Zeit: 11.10.1991
- II = 仲井 斌: 「ドイツはまだひとつではないー東西の『心理構造』を読む」
- III = 仲井 斌: 「ワイマールがやってくる?ードイツ極右のルネサンス」
- IV = Walter Friedrich: Mentalitätswandlungen der Jugend in der DDR

1990, S. 25-37)

- この研究はライプツィヒ市の青少年問題中央研究所 (ZI) = Zentralinstitut für Jugendforschung) のこれまでの意識調査のストックに基づいてトレンドを導き出そうとしたものであり、従って時折組み合わせが不揃いになることもある(例えば、最初の統計には八五年および八九年十月の学生についての数値が欠けている)のでその点、了とされたい。これは、以下のV・VI・VIIの諸研究についても当てはまることを、併せてお含みおきいただきたい。 ※ページ数。以下同じ。
- V = Walter Friedrich/Peter Förster: Ostdeutsche Jugend 1990 (Deutschland Archiv: 4/1991 S. 349-360)
- VI = Walter Friedrich/Peter Förster: Ostdeutsche Jugend 1990-II. Teil (Deutschland Archiv: 7/1991 S. 701-714)
- VII = Der Spiegel: 12/91
- VIII = 小林公司: 「ドイツにおける国家と法の統一ー統一に表れた二百万失業者の現実とは何か」
- IX = Walter Friedrich/Wilfried Schubarth: Ausländerfeindliche und rechtsextreme Orientierungen bei ostdeutschen Jugendlichen. (Aus Politik und Zeitgeschichte: B16-17/

【世界】一九九三年四月号

【経済評論】一九九二年一月号

chen

(Deutschland Archiv : 10/1991 S. 1052-1065)

尚、梶田孝道氏の労作…「ヨーロッパの極右はなぜ台頭するのか―『ナショナル・ポピュリズム』の誕生」(『世界』一九九三年二月号)からも大いに刺激を受けたことを付記する。



おおつか ゆずる

一九四六年生まれ。小樽商科大学助教授。小樽専攻…ドイツ語教育／現代ドイツ論。論文…「何が問われているのか―『大綱化』と大学の語学教育改革」など。